■研究回顧

わたしの研究生活を語る

塩田　庄兵衛

はじめに
早熟だった子ども時代
学者を志したわけ
幸徳秋水との出会い
労働組合研究と都立大への就職
さまざまな運動との関わり
都立大学から立命館大学へ
松本清張さんの思い出
終わりに

はじめに

問い　今日の聞き取りの趣旨は，いままでの研究生活を振り返って考えておられるようなことについて，先生からお話していただきたいということです。

だいたいの柱としては５つぐらいあります。１つは先生が研究者の道を選ばれた理由，経緯といいますか，いろいろな人生の道があったと思うんですが，そのなかで研究者の道を選ばれたのはなぜなのか。いつごろからそういうことを考えられたのかということです。これが第１点です。

第２点は，研究活動の中でも，先生は研究テーマとして出発点で幸徳秋水を選ばれましたが，その理由，事情についてです。また，幸徳秋水をいつごろから先生は意識されたのかについても，お聞きしたいところです。

３点目は，幸徳秋水の研究はどちらかというと政治社会思想史の分野に属するものだと思いますが，その一方で，労働組合運動や労働組合論，労働運動や社会運動をふくめた形でテーマが広がっていく事情についてです。

それから４点目ですが，先生は労働組合論について「カッパブックス」からベストセラーを出されるなど研究者として労働組合や運動を研究しただけでなく，実践活動にもかなり深くコミットされたわけですね。ここらへんが塩田先生の研究活動における１つの特徴だと思うわけですが，研究

＊以下の聞き取りは，2005年7月18日，文京区駒込の塩田邸で行われた。聞いたのは，五十嵐仁法政大学大原社会問題研究所教授と佐方信一法政大学大原社会問題研究所嘱託研究員（元労働旬報社社員）の２人である。塩田夫人も同席され，答えていただいた部分もある。

なお，本稿を補う意味で，塩田庄兵衛「わが研究生活をふりかえって」立命館大学『人文科学研究所紀要』第49号（1989年12月発行），『21世紀へのバトン－塩田庄兵衛の80年』（非売品，2002年３月）を参照していただければ幸いである。「略年譜」「主要著作目録」についても，同書巻末の付録を参照されたい。

室でアカデミズムの世界から運動を眺めるだけではなくて実践活動にも深く関わられる，そうなった事情，どのようなお考えからそういうことをやられたのかという点についてが第４点です。

第５点が，先生の研究活動，研究者としてのいままでの歩みを振り返られて，何か思うところがあればおうかがいしたいということです。いままでの研究に対して塩田先生がつけ加えられたもの，逆に，やり残したことがあれば，おうかがいしたいと思います。

以上がだいたい本筋の話でございます。もしまだ元気が残っていましたら，印象に残る事柄，印象に残る人物についてうかがいたいと思います。先生は人物に対する鋭い観察眼と批評眼をおもちですが，そういう印象に残る人がありましたら，最後にちょっとお話しいただければと思います。すでに何人かの方については書かれたり，お話しをされたりということがありますので，いま振り返ってみてということで，お話しできる方がおられましたら……。

これは余力があればということで，最初の５点について順次こちらのほうから質問させていただくことにしたいと思います。

塩田庄兵衛略年譜

1921年（大正10）	４月15日、父龍平、母清江の長男として，高知県伊野町で生まれる。
1927年（昭和２）	父が製紙原料商を営むため大阪に移住。
1928年	４月から６年間，大阪市立玉出第三小学校に通学・卒業。
1934年	４月，大阪府立浪速高等学校（７年制）に入学。尋常科（４年間），高等科（３年間，文科乙類＝ドイツ語を主とする）に通い，卒業。
1941年	４月，東京帝国大学経済学部入学。
1943年	９月，戦争のため繰り上げ卒業。大学院特別研究生として２年間徴兵猶予の特例を受け，工業政策のテーマを専攻。期限切れ直前に敗戦で兵役消滅。
1945年	10月，東京帝国大学経済学部世界経済研究室嘱託。
1946年	４月から３年間，（旧制）武蔵高等学校の社会科講師。
	11月，新設の東京大学社会科学研究所助手。労働組合調査と社会思想史関係の研究に従事。
1950年	６月，東京都立大学人文学部専任講師。51年，助教授。
1962年	２月，法経学部教授。社会政策・労働問題を担当。
1966年	４月，新設の経済学部教授，同初代学部長（２期連続）。
1969年	４月から１年間，イギリス，シェフィールド大学日本研究センターに留学。
1973年	３月，自発的に退職して，23年間の東京都立大学生活を打ち切る。名誉教授の称号を受ける。
1974年	４月，立命館大学経済学部教授。78年・79年度経済学部長。
1987年	３月，定年退職。名誉教授，経済学博士（京都生活13年）。
1989年（平成１）	４月～94年３月，流通経済大学大学院担当教授として留学生を指導。

主要著作目録

『幸徳秋水の日記と書簡』（編）未来社，1954年刊，1976年増補，1990年増補決定版
『幸徳秋水』新日本新書，1993年

早熟だった子ども時代

問い　それでは早速ですけれども，最初の，研究者の道を選ばれた理由といいますか，事情といいますか，それはどのようなものだったのでしょうか。

塩田　私は高知県伊野町という和紙の産地として知られている町の製紙問屋の旧家の長男として，1921（大正10年）に生まれた人間です。家業は商業ですから，学問研究とは直接の関係はないのですが，わりと早く，小学校へ上がる前に文字を覚え，書物を読むことは面白いなと熱中しました。私より早く小学校へ行くようになった2歳年上のいとこが隣家に住んでいましたが，年下の私のほうが先に文字を覚えて小学校の教科書を教える関係になりました。文章を読むのは面白いものだと思ったのです。そして彼の家庭教師役をつとめる関係になりました。

問い　小学校の時ですか。

塩田　小学校入学前，満6歳ぐらいだったでしょう。

『労働組合入門』光文社，1961年，1967年改訂新版
『日本労働運動の歴史』労働旬報社，1964年，1974年新版
『弾圧の歴史』労働旬報社，1965年
『現代労働組合運動論』労働旬報社，1969年
『歴史の道しるべ』新日本出版社，1973年
『未来に生きた人びと』新日本新書，1980年
『日本社会運動史』岩波書店（岩波全書）1982年
『レッドパージ』新日本新書，1984年
『実録　60年安保闘争』新日本出版社，1986年
『戦後日本の社会運動』労働旬報社，1986年
『京都にて――1974～1987』（私家版）1987年3月
『河上肇』新日本新書，1991年
『私たちの自由民権運動』新日本出版社，1997年
『土佐のうちと――同時代史抄』新日本出版社，1998年
『人生案内　塩田庄兵衛対談集』（対談者：丸木政臣，木下順二，関谷綾子，松田解子，アグネス・チャン，木津川計，沼田稲次郎）昭和出版，1988年
『母と子でみる　反戦平和に生きた人びと』（橋本進と共編）草の根出版会，1989年
『核言集』（井出洋・安斎育郎と共編）大月書店，1989年
『子どもたちの未来のために――歴史から何を学ぶか』（齋藤公子と共編）創風社，1990年
『木下順二・民話の世界――聞き手・塩田庄兵衛』（木下・塩田・齋藤編）創風社，1995年
『現代の労働問題』（大河内一男・沼田稲次郎・塩田）労働旬報社，1967年
『80年代への検証――現代社会と労働問題を考える』（大河内一男・沼田稲次郎・塩田）労働旬報社，1979年
『昭和史の瞬間（上・下）』（朝日ジャーナル編）朝日新聞社，1966年
『戦後労働組合運動の歴史』（中林賢二郎・田沼肇・塩田）新日本新書，1970年
『歴史対談　近代の波濤と人物像――中江兆民と日本の近代。中江兆民から幸徳秋水へ』新日本出版社，1979年
『松川15年――真実の勝利のために』（松川事件対策協議会・松川運動史編集委員会編）労働旬報社，1964年
『松川運動全史』（松川事件対策協議会・松川運動史編集委員会編）労働旬報社，1965年

問い　それはまた早い。早熟な少年であったと。

塩田　早熟だったと思います。教科書をどんどん読んで暗記しました。

問い　本を読むのも，文章を書くのも好きだった？

塩田　子ども向きに書かれたギリシャ神話に読みふけった味は忘れられないですね。

問い　ただ，先生，田舎の少年で本を読むのが好きで，向学心に燃えて大学へ行くという方はたくさんおられるでしょう。それと研究者になって，専門的に何かを研究する，あるいは研究室に残るというのはちょっと違うんじゃないかと思うんですが。

塩田　そのうちに書物を見て暮らしたいという気持ちになったのですね。

問い　いつごろからそういうことを考えられたんですか。

塩田　中学生時代です。

問い　中学生ぐらいから，将来は学者になろうというような。

塩田　うん。ほかの商売よりも自分には面白そうだという気がしたんですね。

『日本社会運動史年表』（渡部義通共編），大月書店・国民文庫，1956年
『日本社会主義文献解説』（細川嘉六監修・渡部義通共編），大月書店，1958年
『秘録・大逆事件（上・下）』（渡辺順三共編），春秋社，1959年
『戦後日本の労働争議』（藤田若雄共編），御茶の水書房，1963年，1977年改装版
『祖国を敵として――在米日本人の反戦運動』（岡茂樹・藤原彰と共編），明治文献，1965年。のち日本図書センター「日本平和論大系17」（1994年）に収録

（以下塩田編書）
『日本の労働問題』河出書房，1964年
『ストライキの歴史』新日本新書，1966年
『労働問題講義』青林書院新社，1971年，1981年改訂
『労働用語辞典』東洋経済新報社，1972年
『労働用語辞典（第２版）』東洋経済新報社，1980年
『日本社会運動人名辞典』青木書店，1979年
『労働問題の今日的課題』（坂寄俊雄共編），有斐閣，1979年
『基本的人権と労働者』（戸木田嘉久共編），法律文化社，1985年
『河上肇「貧乏物語」の世界』法律文化社，1983年
『河上肇「自叙伝」の世界』法律文化社，1984年
『戦後史資料集』（長谷川正安・藤原彰共編），新日本出版社，1984年
『日本戦後史資料』（長谷川正安・藤原彰共編），新日本出版社，1995年
『女性研究者――あゆみと展望』（猿橋勝子共編），ドメス出版，1985年
『核軍拡の経済学』（非核の政府を求める会編・編集代表），大月書店，1989年

（訳書）
マルクス・エンゲルス著『共産党宣言』角川文庫，1959年
アレン・ハット著『イギリス労働運動史』理論社，1956年
W.Z.フォスター著『世界労働組合運動史』上・下巻（井出洋・橋川文三らと共訳），大月書店，1957年

問い　それは早いですね。

問い　社会的な関心というものも，やはり文章を読んだり書いたりということと同時に，早くからあったということなんですか。

問い　文字に対する関心はかなり早くからおありだったというのはわかります。それが社会についての学問に変わっていくわけですね。学者になろうという気持ちは最初からかなり強くおありだったようですけれども，その学者というのは，どういう学者になるか考えておられたんですか。

塩田　世の中に貧乏という問題があり，人間の間に不平等があるのは不合理だと早くから感じた。わが家はまあ食うに困らない，高知県伊野町の紙問屋ですからね。母親が料理上手で，土佐のおいしい魚も毎日食えるけれども，世の中になんでろくに食えないような人がいるのか。それは不合理じゃないかということを，かなり早くから感じるようになった。

問い　貧しさというものに対して問題意識を持った。矛盾のようなものを感じられたんですね。

塩田　そう。社会矛盾に対する素朴な疑問ですね。大阪に出て郊外の新興住宅地域に借家住まいするようになったのですが，ぼくの小学校は貧しい労働者の家庭が多い地域だったんですね。小学校は大阪市立玉出第三小学校です。小学校に上がるころ，親父が製紙原料商になって母親と私の3人家族で大阪へ連れられて出て，そこで，市内に父が事務所をもち，郊外の新開地で借家住まいを始めたのです。

生活環境が変わって，世の中にどうして貧乏な人がいるんだろうという疑問を感じました。うちはそこそこ食ってる。親父は毎晩晩酌をやってる。で，わりと旨い母親の手料理が腹いっぱい食えるのに，友だちの家へ遊びに行くと，こっちが悲しくなるような生活を目にすることがある。だから社会の矛盾という言葉はまだ知らないけれど，そういう現実を早く感じて気になりました。

それから朝鮮人問題です。在日朝鮮人の部落が近所の町はずれにあり，小学校でも同級生になる。なんで彼らはこんなに貧しい生活をしなくちゃならないのかと思った。ところが，うちの親はちゃんとしていて，母親は友人を差別しない。うちへ遊びに呼んでいいって，お菓子もけっこうあげるわけね。そうすると，向こうも仲良くしてくれる。それは特別のことをしてるって感じじゃなかったんです。

問い　しかし，先生は結局，エリートコースで7年制の大阪府立浪速高等学校に入っていかれますね。

塩田　そう。難関だといわれていましたが，入試をうまくクリアして，中学，高校はいわゆるエリートコース。

問い　そういうことと，いわば学問をなさるというか。友人の，いま貧乏とおっしゃいましたけれども……。中学，高校と，つきあう友だちの階層が変わっていくわけですよね。そういう中でもそういう気持ちはずっともち続けておられた。

塩田　そう，ずっとね。だから貧乏という問題は早く意識したと思いますね。なんで世の中に貧乏があるんだろう。うちはともかく食うに困らない生活をしているし，本を面白がるということがあって，よく本を買ってくれるわけです。

問い　坂本竜馬とか。

塩田　坂本竜馬というのは，土佐では人気抜群で，みんな好意をもち尊敬してるから，わりと早

く興味をもちましたね。だから竜馬は少年時代から身近な人でしたね。

問い　郷土の偉人というか，有名人，英雄ですからね。

塩田　そうそう。人気抜群ですね。

問い　武市半平太，武市瑞山はどうですか。

塩田　彼は竜馬の先輩で，すぐれた指導者だった。

問い　先生，その他にも何かあったんですか。社会に関心を持つような。

塩田　まあ食うには困らなかった中くらいの小市民生活でしたが，友達に工場労働者の子どもやろくに食えないようなのがいるわけ。だから早くから社会の矛盾というのを感じたんです。

問い　しかし，よほど感性豊かでないと，自分が貧乏でないと。

塩田　そういうある程度の敏感さというのはあったと思うな。だいたい天皇制に反対だったから，子どもの時から。

問い　それはまたどうしてですか。理由というか，事件か何かあったんですか，きっかけのようなものが。

塩田　母の思い出話では，ぼくは帽子が大好きで，帽子を脱ぐことを嫌がっていたそうです。当時皇太子だったのちの昭和天皇が地方巡りで郷里のわが町に来られたそうです。その時に帽子をかぶっている見物人はだめだといわれた。

問い　なるほど。取るように言われたんですね。

塩田　僕は拒んで泣いて暴れて抵抗したんだそうだ。それが“レジスタンス”の最初だったようだね（笑い）。警官たちが困って，この子，ちょっとよそへどけといてくれって。そのために皇太子を見物しそこなった子守りの女中さんがむくれていたと，母親がよく話していましたね。

問い　反骨精神は生まれつきだと。

塩田　うん，どうも土佐で言う“いごっそう”だね。三つ子の魂なんとやらでしょうね（笑い）。

学者を志したわけ

問い　それは先生，普通そうだと運動のほうにひかれていくのが一般的ですけれども，先生の場合は学問的に研究する方向に結びついていくんですよね。それはなぜなんですか。

塩田　“伝説”によると，ぼくの母親の先祖に，清和天皇16代の後裔というせりふを売り物にするおばあさんがいて，源義経との関係は知らないが，うちの先祖だと聞かされていた。

問い　源氏じゃないですか。

塩田　うん。清和源氏だ。それで母方のほうのお祖母さんがいい教育をしてくれました。孫の僕の目にはすごく博識で能弁で講談をよく読んでいる。だから世の中にお祖母さんの話ほど面白いものはなかった。それで文字を早いとこ覚えて，お祖母さんたちが愛読している講談本を読んで，書物を読むのは面白いものだとさとったのでしょう。

問い　じゃあ，ある種，自然に学者の道を志して，そして大学に行って研究室に残るということになったと理解してよろしいんですか。

塩田　うーん，ちょっと単純化しすぎるかな。

問い　先生，経済学部にいらっしゃったのはどうしてですか。

塩田　小学生のころから大阪の我が家によく出入りして，「庄ちゃん（すなわち庄兵衛くん）も法学部に行って司法官になれ」とすすめてくれた親しい弁護士さんがいました。私は河上肇先生をまだ読んでいませんでしたが，『貧乏物語』に関心を持って経済学部に入り，大河内一男先生の門下生の道を選びました。私としては納得のいく人生を選んだことになると考えています。父親の希望は製紙業の技術者になることだったそうですが……。

問い　先生，中学は自宅から通われたんですか。

塩田　中学は自宅から通いましたけれども，高校生になってからは下宿しましたね。親が口うるさくて窮屈で，自宅から通うのは面白くないから。

問い　それで中学生時代から治安維持法に興味をもたれて，それがその後の研究テーマと何か結びつくんですか。それが幸徳秋水ですか。

塩田　いやいや，幸徳秋水にはすぐは行けないからね。彼は死刑になって消されていて，まだ出会っていない。だが，社会の矛盾というのを感じはじめて，貧困という問題が気になってきたわけですね。

問い　貧困の問題を勉強したいということですよね。それで結局，大河内ゼミのほうに行かれるわけですけれども，その大河内ゼミに入る経緯みたいなものはどうですか。大河内先生の名前は大学に入る前からご存じだったんですか。

塩田　高校時代から，お名前だけは知ってました。しかし，当時はその先生の河合栄治郎さんの本を愛読していて，彼の弟子になりたいとあこがれていた。ところが，1939年に東大で「河合事件」が起こって，河合さんはクビになってしまった。もう１つ，私が東京の大学へ行きたかった理由は，芝居が，新劇が見たかったんです。これは強い動機だった。山本安英，滝沢修，宇野重吉さんなどの舞台にあこがれていて，東京へいって新劇を見たいと思っていました。

ところが，それもだめになった。治安維持法による弾圧でいい俳優さんたちがみんな捕まっちゃったんですよ。だから戦後になって，新劇が息を吹き返してから，宇野重吉さんとか，山本安英さんとかとお付き合いすることができました。そして，新人の木下順二さんがすばらしい仕事を始められて，お付き合いができました。ぼくが一番敬愛する先輩は木下順二さんです。戦後あの人とめぐりあえてよかったと思っていますが，それは後の話です。

問い　木下さんとのおつきあいは，たまたま戦後の偶然ということではなくて，先生としては若い時からの夢というのか，あるいは芝居好きみたいなものの必然的な結果として，そういうおつきあいがあるということですね。

塩田　ええ。そうですね。だから自分がこの世に生まれて，いろいろな分野のいい人にはたくさん出会ったけれども，それは戦後のことです。一番よかったと思っているのは，木下順二さんと知り合いになったことです。さっきいったように，はじめは東京へ出て，河合栄治郎さんを師匠にと思っていたんだけど，河合さんはいなくなっちゃうし，新劇もつぶされちゃったしね。

その後，河合門下であった大河内一男という，よくできる助教授がいるということを知ったんです。この先生の『独逸社会政策思想史』（日本評論社，1936年）などを読んで，この人の門下生になりたいと考えて，生涯の恩師となる大河内先生の弟子にしていただき，演習ではマックス・ウェ

ーバーの学問・方法論を勉強して，100枚ばかりの稚拙なレポートを書きました。兵役延期の特別措置で卒業後２年間，大学院特別研究生として製鉄業や石炭鉱業などをかじったものですが，西洋経済史の大塚久雄先生にもずいぶん教えていただきました。その前に平野義太郎先生，山田盛太郎先生たちの本を読むようになりました。それらの方々は敗戦までは社会的には不遇の立場だったけれど，戦後，接触する機会をもつようになって，学問的にいろいろ面倒を見てくだすった。

幸徳秋水との出会い

問い　それで経済学研究の方向に進まれるわけですね。次のテーマとも関わるんですが，幸徳秋水というふうにならないですよね，ふつうは。どうして経済学研究をやりながら，幸徳秋水をテーマにされたんですか。

塩田　戦争中，くそ面白くない生活で窮屈な思いをして，日本という国はおかしな国だと思っていたわけで，“敗戦ショック”でマルクス主義文献を読みはじめ，自由民権を研究しようと考えていました。そして，幸徳秋水という人間が存在していたことを知った。しかも郷里の高知県の生まれだということ。で，偶然，50年ぶりに名誉回復だという記念行事のことを知って，そこへ行ったんですね。

問い　それは，敗戦の年に行かれるんですか，中村（現・四万十市）へは。

塩田　敗戦の直後，郷里の伊野町に帰省して，とにかくはじめて幸徳秋水という“逆賊”が日の目を見て，偲ぶ会をやるという『高知新聞』の記事に出会った。親父に「中村というところへ行ってみたいから汽車賃を出してほしい」と頼んで，えらい不便なところだったけれども，はるばる山を越えて行った。

問い　当時は列車は通っていなかったんですか，中村までは。

塩田　列車は途中までしか通っていなかった。それから先はトラックにつっ立ってゆられて行ったのですが，非常に感銘を受けました。つまり，「明治天皇暗殺計画」というデッチあげ事件の犠牲となって死刑にされた秋水が，35年ぶりに名誉回復ということで記念行事があり，そこへ迷いこんでいったわけです。

問い　それは新聞の記事を見て，「あ，ここへ行こう」と思って行かれたわけですね。

塩田　そうそう。秋水はそれまで大逆事件の凶悪犯ということで，逆賊の非国民扱いだったわけですよね。それが敗戦後になって価値観が逆転して，名誉回復ということになった。読んでみると大変立派な文章を書いている。中江兆民の愛弟子で名文家ですね。現在は私が地もとの依頼で作文した大きな記念碑が旧中村市の公園に立っています。

そう言えば，「改造文庫」で幸徳の本が出ていた。『幸徳秋水集』（改造社，1929年）があった。儀我壮一郎（現大阪市立大学名誉教授）を知ってるでしょう。彼はぼくとポン友だったからね。

問い　で，幸徳もそうですか，儀我先生が教えてくれた。

塩田　そういうこと。戦後最初の『共産党宣言』（新社会社，1946年）の翻訳も，大河内演習の親友・儀我壮一郎君にすすめられてやりました。郷里の家で正月休みに一生懸命翻訳して，戦後の新訳をこしらえたわけです。志保田博彦というペンネームの「博彦」は病気で早く死んだ弟の名前

ですがね。

問い　それについては大河内先生の示唆なんか，まったくないんですか。

塩田　先生にはドイツ文のテキストを拝借し，訳文に目をとおしていただきました。いま角川文庫に入っています。

問い　幸徳に出会ったのは，天恵のようなものじゃないですか。

塩田　敗戦のおかげで時代が逆転しはじめたのですね。そして，結局，秋水の専門家になっちゃったわけです。

問い　はじめての著作『幸徳秋水の日記と書簡』（未来社，1954年）というのは，何かのシリーズの一部だったと聞いていますが。

塩田　あれは，もと中央公論で例の横浜事件で弾圧を受けた人たちが世界評論社という出版社をつくり，平野先生を代表にして幸徳秋水の選集を出すときに誘われたのがきっかけですね。

問い　それで仕事の依頼がきたわけですね。

塩田　そうそう。ぼくが中村まで行ったから，あいつはあんなところまでわざわざ行ったやつだって伝わったんだろうね。ぼくも敗戦をきっかけに日本の民主主義思想史を勉強しようと思っていたところでしたからね。

問い　そうすると，先生が労働組合研究をやられるのは本筋で，幸徳秋水研究は一種の偶然で，そこにつけ加わったプラスアルファだったということなんですね。

塩田　そういうことになるでしょうかね。私は縄張りにあまりこだわりませんがね。戦争中は徴兵猶予で工業政策の勉強を開始していました。そして並行して，自由民権思想史を勉強しようと考えて幸徳秋水にめぐり合えたわけです。

問い　ぼくはいままで逆に理解してましたけれども，いまのお話をうかがうと，労働組合のほうがずっと本筋の研究テーマとしてあって，それにいま言われた天恵のような，『高知新聞』の記事を見て，幸徳秋水の名誉回復の集会があるということでそこに行かれ，それからいろいろ資料を調べたり，仕事の依頼があったりというようなことでもう１つの研究テーマがつけ加わったという，そういうことですね。

塩田　まあ，そうですね。それをわりと積極的にやったものだから，あれは幸徳秋水の専門家だというふうにレッテルが貼られたんだな。戦後最初の目立つ仕事のひとつでしたからね。

問い　ただ，将来的にいえば，社会運動史研究ということで，いわば総合されるわけですよね。

塩田　そうです。そういう気持ちはありましたからね。日本の民主主義思想の伝統への関心ということと戦前以来の日本の進歩的社会思想史，土佐の自由民権への関心など社会運動史，社会思想史は私の性分に合うと考えましたね。

問い　なるほど。そうすると労働組合研究をやられるのは，ゼミとの関係からいえば通常の，つまり大河内ゼミとしての本来的テーマということなんですね。

塩田　まあ，そうでしょうね。何しろ大河内先生は守備範囲が広いから何でも私の学問的関心にこたえて下さって，私にはずいぶんありがたかったですね。

労働組合研究と都立大への就職

問い　労働組合研究との関連でやはり大きなポイントになるのが，あの時の大河内先生を中心にやられた調査ということでしょうかね。

塩田　そうそう。戦時中は東大の大学院特別研究生として徴兵延期を受けているうちに敗戦になり，戦後，社会科学研究所ができた時に，最初の助手として採用されたわけです。それは矢内原忠雄先生が社研の所長になられた初人事だったんです。

問い　先生が都立大にいらっしゃるのは，どういう経緯ですか。

塩田　松田智雄先生の関係です。“大塚史学のドイツ支店”という評判のあった松田先生は，旧制都立高校からのちに東大経済学部教授になられ，国会図書館長も務められましたが，その松田先生が，「都立大学という新しい大学ができるんだが，あそこへ行ったらどうだ」といってすすめてくださったんです。

問い　それで，すんなり都立大学行きが決まったんですか。

塩田　そこで大河内先生に相談したら，先生は「都立大には知人はいないねえ」というお話で，「矢内原先生にご相談したら」といわれた。そこで，矢内原先生に「新しく都立大という大学ができる，そこに推薦してもらえたらというような話が耳に入りましたが」といったら，「新設される都立大は知らんけれども，その学長になられる柴田（雄次）学士院院長なら自分はよく知っている。柴田さんが学長なら自分は推薦状を書ける」といわれて……。

問い　矢内原先生が推薦状を書かれたんですか。

塩田　ええ。「すぐ書くからちょっと掛けて待っていたまえ」といわれて，矢内原さんの部屋で，ぼくは観察してたんだよ。すると，まるで便箋と組み打ちするような気合だね。ぼくは推薦状を書いてくださるのを眺めていたんです。そして「書いたから持っていきなさい。封をしないでおくから，読んでいいよ」というので，封筒をそのままもらって，大河内先生の研究室へ行ったんです。「いま矢内原先生から私の推薦状をいただいてきました。都立大の新しい学長になられる方に宛てた手紙です」とお渡ししたら，それを読まれて，「ふーん，塩田君って偉いんだね」って，大河内流の言い方でしたね。

問い　それで就職の話はうまくいったんですね。そうすると，矢内原先生は，先生が東大の助手になる，都立大学に行くという節目節目で協力してくださったわけですね。

塩田　そのとおりで，深く恩義を感じています。

さまざまな運動との関わり

問い　それで都立大学のほうに移られるわけですけれども，このころから先生は，いろいろな社会的な運動や政治的な運動にも関わられるようになるんですが……。

塩田　そうですね。世の中が急に動いて，自由に書物が読めるようになり，マルクス主義が解禁になり，民主的研究団体がぞくぞくできて目がくらむような明るい空気になりました。私にとっては生まれてはじめてのワクワクするような毎日で，猛烈に読んだり，会合したり，しゃべったりし

はじめました。当時は歴研（歴史学研究会）の委員をやり，永原（慶二）君とぼくと松島（栄一）さんなどといっしょに歴史学研究のシンポジウムでしゃべったりしたことがあります。すぐれた歴史家として尊敬するようになった石母田正先生からも，いろいろ指導されました。

問い　50年代から60年代にかけて，先生はいろいろな運動組織と関わりをもたれて，しかも一参加者ということではなく，例えば，事務局長だとか，かなり中心になってまとめるような仕事をやられてますね。これは何か事情みたいなものがあったんですか。ただ偶然にそういうふうになっていったということなんでしょうか。

塩田　まあ，偶然でしょうね。戦後当初は人手不足で多忙でしたよ。私自身も初心者ですが，平和と民主主義の運動が魅力的で新鮮に感じ，使命感をもって積極的にのめりこんだのですね。

問い　偶然といえば偶然。その場合，嫌がる方がたくさんおられるわけですよね，研究者としては一般的に。外で演説をするよりは家で本を読んでいたほうがいいとか，研究室で研究したほうがいいというような。つまり実践活動で時間をとられることは研究の妨げになってしまうということで，ある程度，距離をおく方が多いなかで，先生はそういうことをされなかったわけですね。積極的に関わって，なおかつ重要な役割を演じられた……。

塩田　「俺にやらしてくれ」なんていうのではなかったけれどもね。マルクス主義流行の時代の状況，戦後民主主義の出発点という情勢が強く作用したのでしょうね。嵐のような毎日でしたよ。

問い　それはどういうお考えだったんでしょうか。邪魔だというか，マイナスになるというふうには考えられなかったんですか。

塩田　逆でしたね。これは重要な仕事だから，民主的な研究団体や運動など自分自身の解放のためでもありますね。日本科学者会議とか，歴研とか，そういうものを育てるお手伝いをすべきだというふうに思っていましたね。

問い　研究の面でプラスになるということはありましたか。

塩田　大ありだったと，自分では思っておりますね。しかし，時間をとられたことは事実です。健康にも害はありましたね。

問い　ただ，必ずしも先生のご専門と，そういう運動というのは矛盾するものではなかったと思うんですけれど。

塩田　そうそう。だからやった。おっしゃるとおり。戦後派の新人として教えてもらった。

問い　そういう運動との関わりで，例えば，新しい研究テーマが出てきたりとか，あるいはその後大きく先生の専門の１つになっていったというようなことは，何かあるんでしょうか。

塩田　みんなで知恵を出しあったり，教えあったり，目がくらむようなやり甲斐を感じましたね。平和と民主主義に目覚めさせてもらって，組織運動，大衆運動に生甲斐を感じて参加しはじめたのですよ。

問い　中国で開かれたいわゆる北京シンポジウムに，松川運動についてのレポートを持ってお出かけになったなんていうのは，やっぱり１つの大きな経験じゃないですかね。

塩田　あれは面白かったですね。北京での私の松川裁判報告には大きな国際的な反響がありました。ついでにピョンヤンにも招いてもらいましたよ。

問い　労働運動史研究会もそろそろ……。まだですか。

塩田　もうちょっと後です。あれも大河内先生に会長を引き受けていただき，私が二代目会長で忙しくやりました。今は，休眠状態で申し訳ないです。

問い　それに社会政策学会もそろそろ。

塩田　そう，社会政策学会が戦後再建され，わりと早い時期から大河内先生のお声がかりもあって，幹事役として藤本武先生の驥尾に付して私も末席に連なっていました。

問い　だから，科学者運動，あるいはそういう学会活動という，いわゆる対外的な活動や運動にかなり積極的に関わる……。

塩田　使命感をもって意識的に関わっていきましたね。海外にもたびたび出かけて，いろんな国をのぞきましたね。

問い　一貫してますよね。学術会議までいくんだから。

塩田　そうだ。学術会議なども，ぼくは面白かったですね。岡倉古志郎さんや渡辺洋三さん，ああいう冴えた頭の持ち主のお手伝いをしてきて……。婦人研究者問題をとりあげて，私が委員長になったりして。

問い　つまり，専門は違っても，それぞれの専門でかなり優れた能力，人格，識見をもつ方々と知り合いになれるという，そういうプラス面があるということでしょうね。

塩田　そうですね。それは確かにプラス面があったと思ってますけれどね。

問い　そういうなかで，ベストセラーの『労働組合入門』（カッパブックス，1961年）を書かれたんですね。これで先生は一財産を作ったと聞いていますが……。

塩田　そうそう。よく売れましたね。いまは全部パアですがね。あれが私の代表作ときめつけられるとわびしいですが，話題作にはなったでしょうね。

問い　「カッパブックス」の一冊だった。そうすると，かなり忙しい毎日だったということですよね。

塩田　あれはもともと国際会議出席のため，旅費をひねり出すために書いた。そうしたらよく売れて，お釣りが来た。

問い　もともとは，外国に行く旅費をひねり出すためのものとして，企画されたんですか。

塩田　岡倉さんのおすすめでね。

問い　外国に行くって，ヨーロッパのほうですか。

塩田　そう。モスクワの東洋学者会議と，ストックホルムで開かれた国際歴史学者会議に参加するのに役だったのです。ストックホルムでは，スウェーデン国王と握手しました。いまでもまだ，昔，青年時代にあの本を読んだなんていう人が，地方へ行くと現れますよ。

問い　あの本しかなかったわけですよね。労働者でも学生でも，労働組合運動を全体として知るためには……。

塩田　そう。入門書としては便利だということで。

問い　あれから，組合との関係は深まるんですか。組合関係はその前から深まっていたんですか。

塩田　もともと調査活動で労働組合とのおつき合いはかなりありましたが，うんと深まったでしょうね。あれでもう，一年に何十回も労働講座に呼ばれてたね。

夫人　いま書庫の整理をやってるんですけれど，「よくもまあ，あんなに」と思うくらいの講演の数。

問い　全国の津々浦々，回ったんじゃないですか。行ってないところがないんじゃないですか。

塩田　ぼくは現在まで，日本の都道府県はいちおう全部行きました。沖縄から北海道までね。

問い　その記録が残っているわけですか。

夫人　宣伝パンフだとか，案内状とかね。それに，そういう組合運動以外にも，松川事件とか下山事件などの民主主義運動。

問い　そうですね。もう１つの流れとして，組合運動の流れといっしょの時期に松川運動その他の弾圧事件との関係がありますね。

塩田　亡くなった松田解子さんなど，ああいう人たちとごいっしょに。松川はずいぶん一生懸命やったな。それに，広津和郎さんの執筆・講演活動のがんばり。

問い　ええ。だから広津先生が『中央公論』にずっと書いている，そういう時期に先生もそういう運動に加わっておられるということなんでしょうね。

塩田　労働旬報社じゃないかな。ぼくを引っぱりだしたり，舞台に上げたりしたのは……。松川は主役は広津和郎先生その他……。岡林（辰雄）弁護士とか，もちろん，死刑判決で苦しめられている被告たちとその家族の人たちの当事者。弁護士では上田誠吉弁護士と腕を組みました。最近は中部電力（中電）です。

問い　レッドパージ関係ですね。その電産関係で差別撤回で裁判もやられる。それも先生は積極的にかかわられて勝訴しますね。最後はとうとう「母さんの樹」（佐藤貴美子作）という映画にまで出ちゃったわけですよね，先生は。

塩田　あれは上田誠吉弁護士といっしょに裁判官になって出演しましたね。全逓，郵便局です。

問い　そういう電力，郵便の裁判闘争に先生も関わるわけですね。『レッドパージ』（新日本出版社，1984年）についての本を書いてからですか。

塩田　いや戦後早くから電産をはじめとするレッドパージとの闘いについては勉強していましたから，電力の労働組合とは長くおつき合いしましたね。あの本はよく売れました。

夫人　法廷証人になったでしょう。そうしたら中電の人から，勝利宣言した後だったけど，よく「奥さん心配じゃなかったですか」なんて言われましたよ。

問い　中部電力の裁判にそうとう肩入れなさって，証言に立たれて，やられましたね。長かったです，あの裁判も。先生は『レッドパージ』の本を出される前から，中電の事件はやっておられたような気がします。

塩田　電力と国鉄に，ぼくは戦後早くからつきあいが多かった。基幹産業として関心を持ったんですね。鉄道と電力，こういうのはわりとぼくは積極的につきあったな。ほんとにしょっちゅうだったね。それで大会へ傍聴に行ったよ，方々。集会は温泉場でやるから，日本中の温泉にかなり入ってるわけだ。

問い　国鉄に話を戻しちゃうと，やっぱり先生，国労がずっと上り坂で，要するに日本の闘う組合の中核にずっとなっていく過程で，結局，彼らの勉強を，国労はなかなか学習が盛んで，という関係でしょうか。

塩田　そういう事情がありましたね。国鉄労働組合は学習熱心でしたね。余談ですが私は機関車に乗ったこともあるし，電車を運転したこともありますよ。

都立大学から立命館大学へ

問い　都立大学でとくに思い出深いこと，沼田稲次郎先生との関係なんかどうだったんでしょうか。

塩田　沼田さんとはよかったな。法学部長として，経済学部長としての私をよく面倒みていただいた。すぐれた労働法専門家で哲学に強い，大きな人物でなつかしいな。労働旬報社の企画で大河内先生と沼田先生の対談を，私が司会して10年以上つづけて勉強させてもらったね。

夫人　都立大学時代については，やっぱり自分が若かったことと，それから一番，学生さんたちといっしょに勉強できたのは，あの時期だっていうことはいってますね。

問い　まあ，ゼミの先輩を見ても多士済々で，先生，大変だったろうと思う反面，楽しかっただろうと思う方もたくさんいますよね。

塩田　面白かった。ゼミの卒業生とはいまでも仲良くつきあっている。

夫人　そう。自分も元気だしね。あんまり年も違わないですからね。やっぱりそういう時期というのが一番いいんですね。

問い　都立大はなんていったって，大学がこじんまりしていてよかったですよね。それで，学生と先生との家族的な接触があった。

夫人　演習らしい演習。つぎに立命館に行ったのは戸木田嘉久先生のお世話ですね。

塩田　そう。戸木田さんが立命館に来ないかといって誘いに来てくれた。京都はよかったな。居心地よく楽しかったですね。

夫人　大河内先生が用事で京都にいらして，それで時々電話をくださって，お呼びがかかったのね。「塩田君，あなたは大変お忙しい方でいらっしゃるけれど，今晩，お食事いかがですか」って，そんな調子ね。

塩田　そのとおり。先生とのおしゃべりは楽しかったな。

夫人　大河内先生はもう東大総長を辞められた後で……。でも，ウマがあったみたいね，そういう場面で。先生は黙ってる人とは話しにくい。だけど，勝手におしゃべりしたり，愉快におしゃべりする人とは，ちょっと食事なんかしてると気分転換になっていいみたいなんですね。

塩田　だから，立命館を終わって東京に戻ってきて，大河内先生とおしゃべりを楽しもうと思っていたら，ぽっくり亡くなられたんでがっかりしたな。

夫人　あとは流通経済大学ですね。京都から戻って１年して流経大。

問い　流通経済大学に行かれる事情はどういうことだったんですか。どなたか引っぱられる先生がおられたんですか。

塩田　ありました。あれは松本君だったね。

夫人　浪速高校・東大経済学部とずっといっしょだった松本達朗先生です。その方が流経大の先生だったんです。

塩田　もっとも，佐伯（弘治）学長に頼まれて……。塩田を大学院要員として引っぱってくれって頼まれて，松本君が使いに来たんだ。

松本清張さんの思い出

夫人　そういえば，松本清張さんが流経大に講演に来られたことがありましたね。

塩田　佐伯学長に講演の依頼を頼まれて，天皇制論をやっていただいた。清張さんは印旛沼のうなぎの蒲焼をもらって帰られた。

問い　松本清張とお知り合いになられたきっかけは何なんですか。

塩田　きっかけは下山事件。

夫人　研究会ね。

塩田　南原先生を“大将”にしてね。団藤（重光）先生や沼田稲次郎，木下順二，桑原武夫さんら合計10人で，日比谷のレストラン，松本楼で月例の……。

問い　松本楼で下山事件の月例研究会をやられてたんですか。

塩田　ぼくが幹事役でね。一番年齢が若いから小使役でした。松本さんの原稿料が基金になって……。

問い　清張さんが原稿料でお金を出して，それで研究会をやっていた。

塩田　清張さんは，一回，週刊誌に書くとめしがくえる原稿料が出るんですね。それで「塩田君，これを君に預けるから，これ使ってやってくれ」っていって。それで，「いや，ぼくは自分の所に入れると危ないから口座を別にしておきましょう」って，そういうことだったんです。

思い出したけど，清張さんが亡くなるちょっと前，「かねて昵懇の間柄の塩田庄兵衛氏から聞いた話だがという書き出しで，それからある物語が展開するんだ。こういう書き出し使っていいか」っていって，電話がかかってきた。ぼくはいいも悪いも，「あなた，好きなようにおやり下さい」とお答えしましたが，あれは何だったかな。たしか，軍国主義復活の内幕バクロだった。

清張さんにはよくご馳走になったな。電話がかかってきてね。「今晩ひまですか」「どこそこで飯食おう」なんていってね。いっしょに飯食ってしゃべるのが面白かったのかもしれないな。

問い　清張さんも話好きなんですか。ペラペラしゃべるほうですか。

塩田　小説と同様，博識で面白い話を聞かしてもらったですね。

問い　松本清張さんは，先生のもの知りぶりを楽しんでおられたんじゃないのかな。

夫人　もの知りの方には，いっぱいおつきあいしてらっしゃると思うの。沼田先生はどうですかね。

問い　沼田稲次郎先生について何か印象に残ることはありますか。

塩田　沼田さんはすぐれた労働法学者でカンの鋭い思いやりの深い，大人物で勉強家でもの知りだった。清張さんを愛読しておられて，「あの小説のモデルは誰だ」というようなことをよく聞いておられた。面白かったね。

ところで，ぼくが一番印象に残っているのは，清張さんが何かご挨拶をしに南原先生のところへ行きたいから，「君，いっしょに付き添ってくれ」って頼まれて，おうちにいっしょに行ったこと

があるんですよ。そうしたら，「ところで松本君，君の小説は面白いと，うちの者がいっとるよ」と南原先生がおっしゃるんだ。失礼な話ですね。

問い　ご本人は読んでない。

塩田　そうしたら，「はあ，どうも恐縮でございます」と，清張さんはかしこまってるの。南原さんのところへは一緒に2度行った記憶があります。しかし，「東大の総長というのは，あんな家に住んでおられるんですか」なんて，質素だっていうので驚いたらしい。「みんなあんなものです」って私は答えたけどね。

夫人　とくに昔はね。

終わりに

問い　最後になりますが，これをやったのがよかったということで，ご自身で振り返ってみていかがですか。

塩田　幸徳秋水はやってよかったと思いますね。幸徳秋水をやった人はたくさんいるけれども，ぼくもその中のひとりとして，よくやったほうだと思う。秋水をあれだけはっきりさせた人間のひとりに入る自信がある。あの仕事はやってよかったなと自分では思ってますよ。

問い　『高知新聞』の記事に出会ったというのは，先生の人生の中でかなり大きなポイントだったということですね。それを見なかったらできなかったわけですからね。

塩田　まあ，遅かれ早かれ知ることにはなっただろうけど。しかし，はっと気がついたのは，敗戦直後の新聞ですからね。大河内演習同窓の儀我壮一郎君が戦時中の文庫本を貸してくれて，ぼくは電車の中で読んで，それであらましを知っていなかったら，あれほど関心をもたなかったかもしれない。

問い　つまり，幸徳秋水が書いた文章を先生は読まれていたわけですね。やっぱり本人の文章を読んでいると違いますよね。しかも，秋水は名文で……。

塩田　それは迫力が違う。

問い　ほんとにいい文章を書きますからね。

塩田　やっぱり取り憑かれたんですな。だから秋水については，自分ではかなりやったという意識はありますね。あれはおそらく私のやった仕事のなかで一番時間を使ってるんじゃないかな。

（完）

（しおた・しょうべえ　都立大学，立命館大学名誉教授）